

春燈

12月号

昭和二十一年七月二十一日發行 第三種郵便物認可

壬戌十七年五月一日發行 每月一回（日發行） 第三種郵便物認可 第十一號

櫻桃子の句

啄木鳥の木を叩き日を短かくす

句集『風色』平成四十六年

師にお目にかかったのは此の岩村で三十年前でした。句会と言うものを初めて体験しその折戴いた短冊です。

古里岩村を底知れず愛され、恋われ、句も数限りなくある中私にも深い深い思い出の一句です。久々に岩村にいらしてゆっくりなされたのも束の間、啄木鳥の行動に帰京を促された思い。「富ちゃん」と呼ばれ打ち解けられたお姿が脳裡にはつきり焼き付いております。

鈴木雅子

櫻桃子の句

鷹の目を鷹匠の目がねぎらへる

「春燈」平成八年二月号

鷹狩は古く朝鮮から伝来した狩猟法。本句は韓国の旅吟である。平成七年十月二十一日から四日間、師に導かれ弟子男女七人の「韓国古寺巡礼」の旅。釜山から慶州、光州、全州、扶余、ソウルへとマイクローバスでの強行軍。しかも毎晩ホテルの幹事部屋で旅吟五句投句の勉強会が開かれた。雛鷹を厳しく仕込む鷹匠櫻桃子の目。弟子共は今あのやさしい眼指を懐しく思い起すのである。

柴崎 甲武信

主宰の句

西ヶ原日記 (十三)

鈴木榮子

自然に逢ひしごとくに上野の美術の秋

東大構内バスの間遠に秋時雨

雁の家もいまはマンション秋徼雨

支那そばと書いてあるゆゑ秋雨やどり

銀座七丁目八丁目十五番街秋の色

いくさで死なぬ男ら逝きしこの秋ぞ

勤務店の年末それぞれ築地ことに

ブロック型日曜始まり日記手帳派

伊東屋の時間延長クリスマス

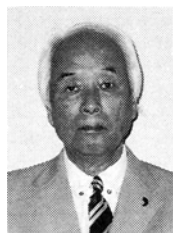
春星賞受賞作（20句）

日雀鳴く

吉田かずや

雪の夜は梁哭けり地震の村
屋根の上に屋号呼び合ひ雪卸し
番頭で終りし父のインパネス
雪国はなべて味濃し煮ころがし
面売りに出前のとどく一の午
日の当たる前列に置く受験絵馬
樺咲くや一茶の里の道祖神
西へ玄奘東へポーロ蟹気楼
野遊びの箸を使はぬ昼餉かな
花冷や天鷲絨椅子のすり切れて
納屋の戸は蹴らねば開かず菜種梅雨
鯉のぼり隣の空を借りにけり
粽解く紐にからむや国訛
年金暮らしの贅とも鰯を叩きけり
花舗の灯の消えて梅雨寒俄なる
読み止しの本の耳折る蛩かな
帽子屋の大きな鏡梅雨明くる
炎天の塩噴いてゐる野球帽
汗のシャツ替へてひと日を折り返す
鍵かけぬ里の習はし日雀鳴く

△受賞の言葉△



吉田かずや

このたび、春星賞受賞の栄に浴し、まことに有り難く、感激しております。

鈴木主宰をはじめとする選考委員の各位に深く御礼申し上げます。

まだ俳歴も浅く、句想も狭い浅学非才の身であり、これから諸先達のご教導を受けながら俳句道をさらに進んでいく覚悟であります。

今回の受賞を機にますます精進していくことをお誓い申し上げます、受賞の言葉といたします。

略歴

氏名 吉田かずや

年齢 七十一歳

出身地 新潟県柏崎市

平成 四年 春燈人会

平成 五年 千葉春葉句会に入会して、安立公彦先生に師事。

生に師事。

平成 十一年 東京都大田区に転居して、さくら句会に入会。柴崎富子先生に師事。

サロメの目

益田寿美子

蟬しぐれ三万石の城下町
下野一望雲あし迅き麻を刈る
夏涸れや口中いやす薄荷糖
奇羅装うて蜥蜴の穴へ入る日かな
踊るサロメ恋の目なざしうたてしよ
灯火親し怪文クイズ解けずけり
一睡の夢のあやふき夜長かな
菊日和最中の皮に菊の紋
忌みごとの夜爪・出針す神の留守
執念で生くる余生の帰り花

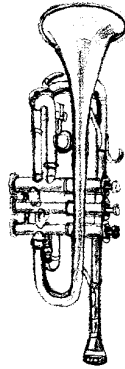
旦
暮

小宮 淳子

息白く足踏んばりてつちを練る
陶笛の梟鳴きも風邪心地
剽げたる丹波の壺のひめつばき
天狼星ひかり惜しまず櫻桃子忌
雪待月未練がましくひとを恋ふ
破れ窯や我がもの顔に兎棲む
柿落葉明日は焚かる薪の上
冬の蛾の火の懐に狂ひ入る
攻め焚や炎の舌の手套なめ
五夜六日焚きおほせたり冬日燦

当月集

鈴木 榮子選



○ 太田佳代子

箸置に箸揃ひけり松茸飯

水澄むや影の真上の雲の影

磁石北指して石榴の割れにけり

肌寒や針に残りし絹の糸

明日へ向け靴を揃へる星月夜

○ 吉田かずや

ピストルに撃たれし運動会の空

退院の夫に挿しやる愛の羽根

幕引きは幕に隠れし西鶴忌

無花果や蹴飛ばし開ける納屋板戸

呼べば声叩けば音の秋澄めり

○ 荻野嘉代子

里帰り真成の墓誌花野ゆく（遣唐使・井真成）

身に沁みし客死の思ひ墓誌にかな

星飛ぶや玄宗在りし日の墓誌よ

秋麗舞ふ女子俑のつけ糸くぼ

周平に読み痴れてゐし良夜かな

○ 白神知恵子

月迎ふ藩主の庭にかしこまり（後楽園）

月見客鶴に一声かけて過ぐ

琴尺八やうやく園の月産まる

月育て老ゆる歳月園の松

名月の夢二の歌碑を照らすかな

春燈の句

鈴木 榮子選

風と曲る菓子屋横町秋うらら

お談義はたうもろこしの茹で加減

カーナジを逸れ渡良瀬の蘆よの原

鹿川しがわに釣宿一つ流れ星

建仁寺垣の棕櫚縄しかと秋立ちぬ

秋祭張り紙残す掲示板

人気なき芙美子の墓や秋の風

落葉焚歌つて聞かす櫛道

首筋に拾ふ秋風那智に來し

唐辛子裏山は黙深めをり

唐辛子伽耶は古代の韓の国

待宵や水に砕ける礧石

学徒兵の遺影の兄に酒温む

ゆく先を思へば長き夜なりけり

埼玉 佐々木 新

丸焦げの秋刀魚おのれに詫びて食ぶ
六星占術に深入り秋扇

いとにくし清少納言秋蚊打つ

紫の君にあらずや虫を聴く

応挙の竜毗喝と秋の声

若沖の虎嘯促す望の月

輪蔵に触れて白萩こぼしけり

寄せ墓に染み入る雨や曼珠沙華

からす瓜ゆれて鎮もる其角堂

歌麿塚残る蚊に耳朶刺されけり

荒事の三枿の袖や天高し

小流れに筏を組みしこぼれ萩

乱れ咲く秋の八千草円舞曲

気まぐれの日歸りの旅花芒



神奈川 松波とよ子

東京 神山 志堂

東京 渡邊 泰子

余言

鈴木 榮子

ピストルに撃たれし運動会の空

吉田かずや

ピストルをたとえ玩具にしても手にすることは先ずない。だがもしピストルがそこにあつて撃つてよいと言われたら空砲でも撃つてみたい。そのピストルを白昼堂々と手にし撃つたのだ。気持がよかつたことだろう。

その撃たれた相手は運動会の空だと言う。まことにはぐらかされた感じだ。言葉の斡旋にユーモアがありやられた感じ。俳句は意外性が成功するものである。ちよつと憎い句である。作者吉田かずやさんは十七年度の春星賞を受賞された。

だからといってそう言う句を狙っている訳ではない。ここ二、三ヶ月吉田さんをよく余言に採つてしまふ。こういうとばけた句が特に好きな訳ではない。でも嫌いではない。

この句は巧まずして出来たものだと思つてゐる。

朝刊の折り目正しく秋澄めり

布村 松景

ポストから出す朝刊はこのごろますます広告で厚くなつてしまつた。朝一番のきちりと折り畳んでゐるのは気持のよいものだ。

そのきつちりさをバサバサにしながら三十六頁位を一覧するのは結構時間がかかる。作者もその聞く前の新聞の折り目正しさに気持がよく秋風の澄みを感じてゐるのだ。

さて、新聞に切りたい記事があつたとき、一旦その頁を通り過ぎてしまふと次に見付けるとき結構見付からない。

このごろ一回流すと切り抜く記事があつたことすら忘れたい。嘆かわしい。忘れるほどの必要度なら切るのを止める。犬、猫が出てゐると必ず見る。当面彼ら彼女らは癒してゐる。

身ほとりに濃き色ふやし秋深む

小林 リン

四季には鮮やかに色があります。いま作者の身ほとりには自然も人事も天文も秋を感じさせる色が溢れています。

女性はまず服装の色が変わりそれによつて街のトーンが替つてきます。これからは春夏秋冬きつちりこの色のこの材質ということが自由になつて来るでしょう。カラフルなどという言葉は日常の中にすでに消化されています。

肌寒や針に残りし絹の糸

太田佳代子

針に残りし絹の糸—はこの作者らしい繊細な眼のつけ所。誰でも女性なら針を持たない人はいない。女性の衣類に使うときは絹糸が多いが短いとすぐなくなるし、長くするとこん

がらかる。針に残った糸を抜いてしまうことはないので、日常もつとものことでも、この作者が詠むとなにか情緒を持って感じられのは不思議である。作者と親しく話をしたことはない。

きつと投句の文字の正確で美しいことも作者のイメージにつながっているのであろう。

(以下略)